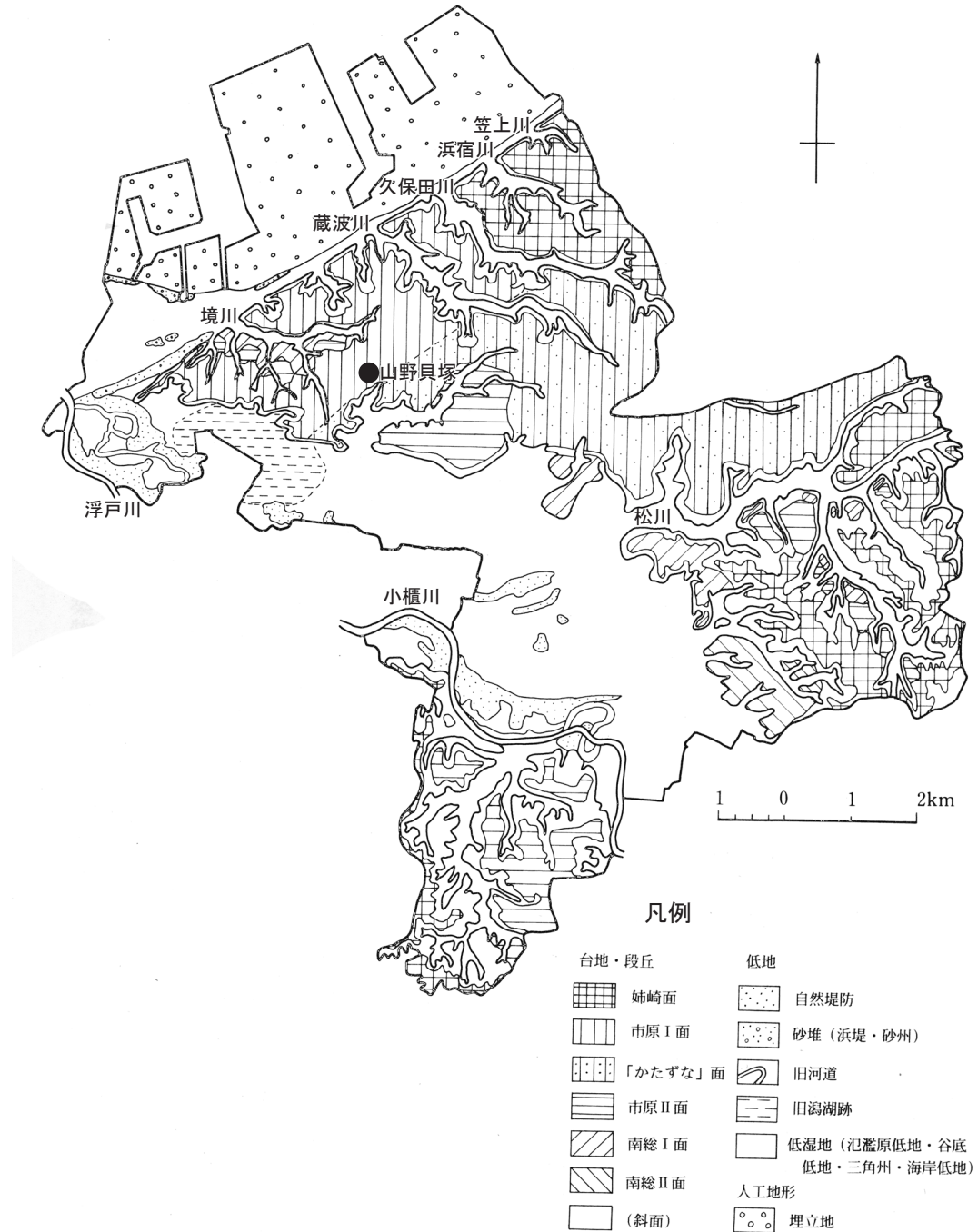


解明するうえで山野貝塚は不可欠の重要性をもつということが出来る。

2. 山野貝塚周辺の地形と立地条件

山野貝塚が所在する袖ヶ浦市は、前述の地理区分の中では内湾東岸南部の北半に相当する。袖ヶ浦市域の地形は、下総台地南端部にあたる北部の台地（袖ヶ浦台地）と小櫃川によって形成された南部の沖積低地に区分される。袖ヶ浦台地は養老川と小櫃川に挟まれた北西—南東方向に細長い地形を呈し、小櫃川の浸食と地形の隆起により高さの異なる段丘面が形成される。本市域では6面に分けられ、高い部分ほどより古い時期に形成された段丘面となる（第3図）。山野貝塚はそのうちの市原I面と呼ばれる約6万～6万5千年前



第3図 袖ヶ浦市内地形区分図（袖ヶ浦市史編さん委員会1999に加筆）

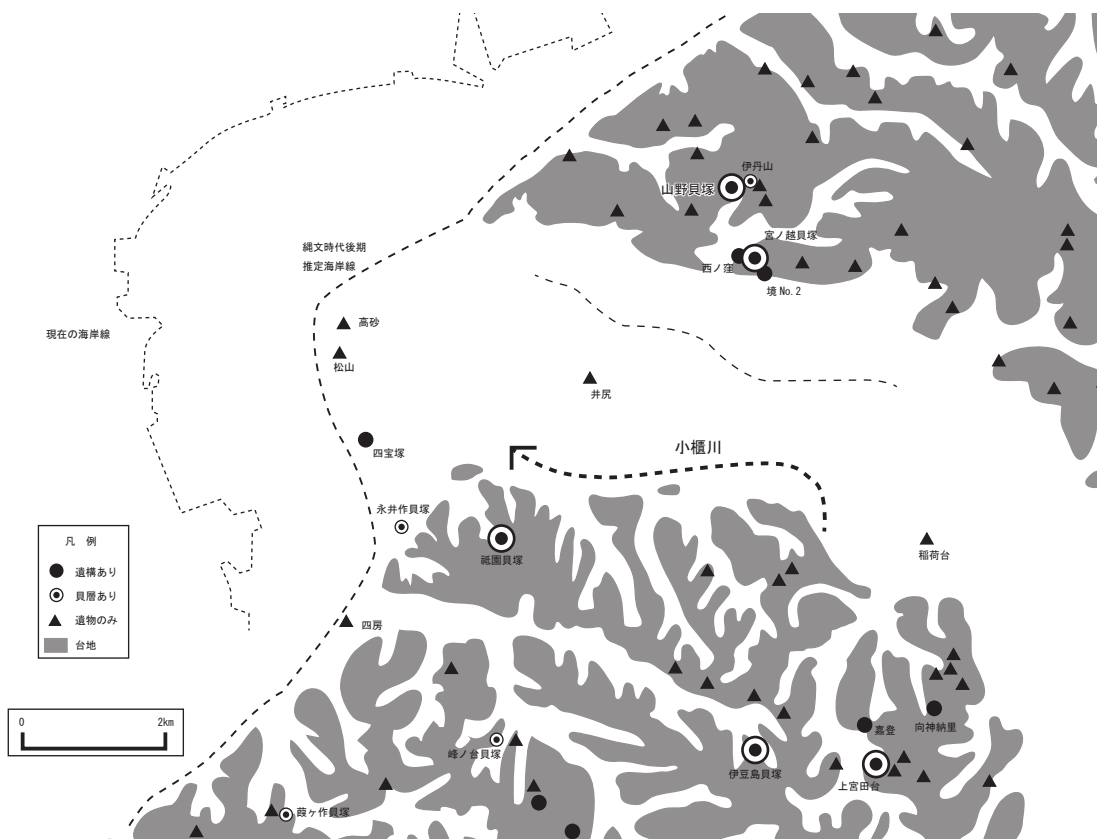
に形成された段丘面に立地する。袖ヶ浦台地は、その南東から北西の東京湾に向かって、北側から笠上川、浜宿川、久保田川、蔵波川、境川の小河川が注いでいる。これらの河川的作用により台地が樹枝状に開析され複雑な地形を呈する。本遺跡は、南側に小櫃川の支流によって開析された比高差約 20 m の深い谷が入りこむ一方、北側は境川最上流域の浅い谷が入り込み、両河川の分水嶺に位置していることになる（第 6 図）。標高は約 37m となる。

約 6,000 年前の縄文海進最盛期には、現在の小櫃川低地まで海水が入り込み「古小櫃湾」と呼ばれる内湾を形成していた（吉村 1985）。海進最盛期以降の海退により、小櫃川の上流より土砂が下流へと運ばれることにより、古小櫃湾の南半分に相当する現在の木更津市側には河成平野が形成されてきたようである。

一方、古小櫃湾北側の袖ヶ浦台地縁辺は湾の水が干上がることにより潟湖が形成され、その後湿地化してきたようである。古小櫃湾でこのような地形変化が引き起こされているのに対し、現在の袖ヶ浦台地西縁から伸びていた波食台が沿岸流による海食をうけ、縄文時代後期には現在の袖ヶ浦台地西縁とほぼ同様な崖線が形成されたようである。つまり、縄文時代後期の山野貝塚周辺は、北側の境川を下ればすぐに海に出られる環境であったといえる。一方、小櫃川方面の低地には湿地が広がっていたと考えられる。

次に、縄文時代の遺跡の分布から海岸線を復元してみる。第 4 図は、吉村（1985）の海岸線推定図に、縄文時代の後期の遺構、遺物が検出された遺跡をプロットして復元した推定海岸線図である。木更津市高砂、松山両遺跡では後期の遺物が出土し、木更津市四宝塚遺跡では後期中葉加曾利 B 式土器の埋設土器が検出されていることから、これらの遺跡付近が縄文時代後期の海岸線であったと推定した。それによると、縄文時代後期段階には小櫃川河口付近にすでにデルタが形成されていたことになる。

山野貝塚が所在する小櫃川右岸には、小櫃川の支流によって深く開析された谷の北側に山野貝塚、南側に



第 4 図 縄文時代後期推定海岸線（吉村1985に加除筆）



第5図 山野貝塚位置図および周辺遺跡分布図